



木もれびの森の野鳥たち 10月

<秋、食べ物は虫から木の実へと>

9月半ばまで、森はツクツクボウシを中心にセミの大合唱につつまれました。クヌギの木にノコギリクワガタ、地面にはウバタマムシ。花の蜜を求めアゲハなどチョウの仲間や赤とんぼも飛び、楽しい昆虫ワールドでした。ときにツクツクボウシがスズメバチにつかまり、地面で羽ばたきながらの抵抗。でもハチの強力な顎には勝てず、徐々にお腹を食べられていく場面にも遭遇！

さて、猛暑を乗り切ることができた鳥たちは…。お彼岸の頃から蝉時雨も収まり、ようやくシジュウカラやメジロなど、混群で動く鳥たちの小さな声が耳に届くようになりました。今年生まれの若鳥も、ほとんど成鳥と見分けがつかないくらいに成長し、動きも活発です。葉の裏に隠れた虫やくるりと巻いた葉の中でマユになっている虫を見つけては次々と食べていました。秋風と共にモズが戻ってきて、さっそく高い木の頂で高鳴きを始めました。

そして、南の国へ向けて夏鳥の渡りも始まり、シジュウカラなどの群れにキビタキも仲間入り。ホバリングやフライキャッチで器用に虫をとり、長旅への栄養補給を。そんななかでキジバトは、熟してきたミズキの実が好物なのか、首を伸ばして枝先の実をついばんでいました。

これからの季節、鳥の食べ物は虫から木の実へと移ります。ヤマザクラの実のように早くから熟するものや、ムクノキの実のように時間をかけて熟していくものもあり、鳥はそれを上手に利用し、実から実へと渡り歩く(飛ぶ)ことで命をつなぎ、同時に種子散布の役割も担います。(瀬尾)



キビタキ

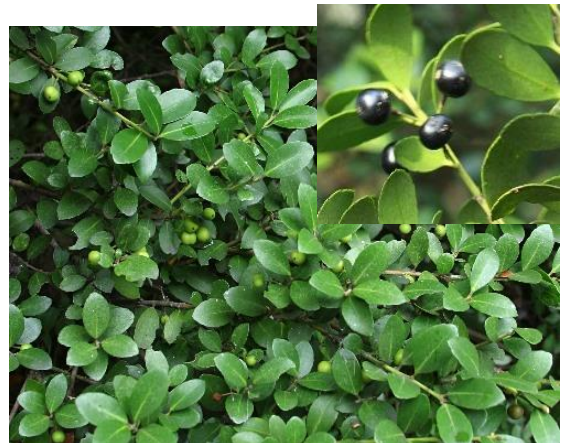
木もれびの森の樹木(28)

今年の夏は連続の猛暑日を記録し、9月に入っても厳しい残暑が続きましたが、9月中旬に襲来した台風18号は東海地方に上陸し関東を直撃、各地に多くの被害をもたらしました。

18号台風が襲来した直後からは文字通り台風一過の秋らしい朝晩爽やかな気候になりました。台風が通過後の森へ入ると強風によるクヌギ、コナラ等の枝葉とともに青い未成熟なドングリが多数落ちていました。

秋の樹木は果実を実らせています。身近に目につくのは低木類の果実です。

ゴズイは赤い果皮から黒い種子が見え出しています。ガマズミも丸く赤い果実は美しく熟しています。サワフタギの果実は美しい藍色に熟し、アブラチャンの果実は丸形、黄緑色で熟すのはすこし先のようなです。



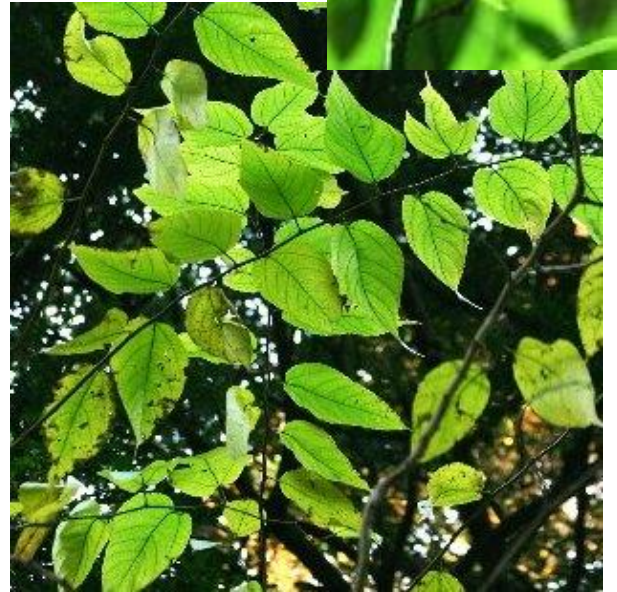
イヌツゲ

今号の樹木は低木のイヌツゲとヒメコウゾです。

イヌツゲ(犬黄楊) モチノキ科モチノキ属の常緑小高木です。高さはふつう2～6m。よく枝わかれし、枝葉が密生します。樹皮は灰褐色で皮目が多く平滑です。花は緑白色であり目立ちません。開花期は5～6月です。葉はタマゴ形で長さ1～3cm、表面は濃緑色です。

秋にマル形の実が黒紫色に熟します。庭木、盆栽に利用され、樹皮からは鳥もちがとれます。

ヒメコウゾ(姫楮・別名コウゾ) クワ科コウゾ属の落葉低木。高さ2～5mになります。樹皮は褐色で長楕円形の皮目が目立ちます。葉は互生し、葉身はゆがんだタマゴ形で長さ4～13cm、葉柄は短く、切れ込みのないものから2～3裂するものがあります。花は雌雄同株、花期は4～5月。果実は集合果で、6～7月に橙赤色に熟します。**コウゾ**は**カジノキ**と**ヒメコウゾ**の雑種とされています。それぞれ古くから和紙の原料に利用されていました。特に**コウゾ**は洋紙が普及する以前は、製紙産業に大切な樹木として栽培されてきました。(林)(写真は「四季の山野草」より)



ヒメコウゾ

木もれびの森の腐生植物

森の中には不思議な植物が生きています。梅雨のさなか、木もれびの森では、見つけることは無いものと思っていた植物にめぐり会え、無上の喜びを感じました。それは「**ギンリョウソウ**」です。森の中には「**オニノヤガラ**」という腐生植物が、毎年目を楽しませてくれます。ところがギンリョウソウの発見は、思いもかけないできごとでした。来年は是非皆さんにも見てほしい野草です。家に持ち帰って育てる野草ではありませんので、足を運んで蟬花のような美しさを堪能してください。(野口)

ギンリョウソウ (ユウレイダケ) 銀竜草

イチヤクソウ科 ギンリョウソウ属 5月～8月

多年生腐生植物 多肉質

茎 直立して一株に数本つつ出る

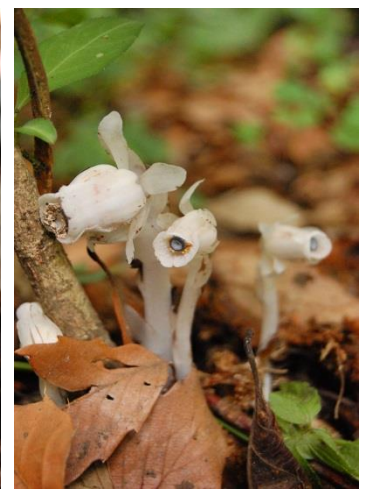
葉 退化した鱗片で多数茎に互生に付く

花 茎の先に下向きに1個つける、花弁は筒状で3から5個

雄しべ 10本、花びらより短い子房は卵円形で花柱は太くて短い

果実 球形 熟すと茎が倒れ果実はつぶれ種を撒き散らす

根以外には色素が無く総て純白色である。



ギンリョウソウ